ラブカクテルス　その８８

風 雷人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ラブカクテルス　その８８

【Ｎコード】
Ｎ４２９０Ｆ

【作者名】
風　雷人

【あらすじ】
今宵は夢中になれるカクテルをご用意しました。ご賞味あれ。

いらっしゃいませ。
どうぞこちらへ。
本日はいかがなさいますか？
甘い香りのバイオレットフィズ？
それとも、危険な香りのテキーラサンライズ？
はたまた、大人の香りのマティーニ？

わかりました。本日のスペシャルですね。
少々お待ちください。
本日のカクテルの名前は極秘建設でございます。

ごゆっくりどうぞ。

僕は今年、高校を卒業して就職した。
そんなに大きな企業ではないが、ヤリガイが売りとなっていた中小辺りの建設会社。
それが極秘建設。
しかし名前が極秘なんて奇妙な会社だ。
でもそんな奇妙なところに惹かれたのも一理あると言えばあるのだが。
会社の入社式に参加して初めて見た社長さんは、かなりの熱がある人らしく、始めの挨拶でのスピーチはまるでどこかの国の独裁者が話す姿と少しダブり、その会場の中の空気には緊張が張りつめて行くように感じられた。
そして歩き方まで、まるで軍隊の様に規律の立った様子は、異様な雰囲気があった。

そして僕達も自然とその周りのペースに飲まれるように背筋が伸びて、息を飲んだ。
粗方のプログラムが終わり、退室の際にはなぜか口々に一、ニ、一、ニと行進を促されながら歩くハメとなる有り様になり、なんだか教官とでも呼ぶのにふさわしい長身の男に怒鳴られながらそれは続いた。
そんな僕達の姿を社長は満足気になりながら眺めて、入隊、いや、入社おめでとうと、大きな声を僕達に浴びせた。
僕はそれを横目に、何だかエライところに来たなと、肩をすくめたのだった。

次の日からは寮生活となり、昼間は研修と現場見学を、例の長身の教官の下、まるで新入隊員の如くに教育され、まさに鬼の特訓を受けるような毎日となった。
そのために身体は筋肉痛になり、新入社員となる仲間からは、そこを逃げ出す者も少なくはなく、十五、六人いた筈の人数は、一週間後には僕を含めて三人しか残らなかった。
そしてそんな中でなぜ僕が逃げ出さなかったかと言うと、ただ単に逃げる事が恐かったからなのだった。
そんなこんなで三ヶ月が過ぎくらいになると、どうやら長かった研修は終わりを見せて、いよいよ僕達は新人社員として仕事に就くこととなった。
そしてそこで残った僕ら三人は、バラバラとなって仕事場に就くことを知り、いつしかまた一緒に仕事をやろうと三人は誓いを立てて、最後の晩は派手に呑み明かしたのだった。

緊張しながら向かった仕事場先は当然のことながら工事現場だった。
足元は資材や道具が所狭しと置かれていて、まだ素人の僕にはかなり物騒な場所に思えた。
そして大雑把な説明を受けてからの初めての仕事に就いたが、それ

は掃除だった。
あんなに辛い研修の後だというのに掃除だなんて。
僕はガッカリしながらも言われるがままにそれに手を掛けた。
しかしただ単に掃除と言っても普通想像する掃除とはかなりの違いに僕は悪戦苦闘するハメになった。
元々床などは、まだ仕上がっていない状態に加えて全ての作業に当たる人は土足なので、その埃や泥などの汚れはキリがなく、散らかった材料などの資材や不要となった廃材などを整理するにせよ、その重さといったらなかなかのものだったので苦労したが、研修の成果が少し役立ってか、何とか言われていた掃除は半日掛かって終らす事ができた。
そして午後からはいよいよ作業の手伝いを言われてやってはみたが、しかし、確かに基本的な知識は研修から得る事が出来てはいたが、建物を建てるというのはなかなか教本の上の紙面にある理屈だけでは上手くいく訳ではないらしく、あらゆる問題が発生しては、それの対応に長年の知恵が必要になるのが常識なのだと、そんな作業の中で十分過ぎるほど分からされてその初日は終わることとなった。
仕事に実際就いた自分は、結局何をしたらいいのかがなかなか飲み込めずに、怒鳴られ叱られての一日になったことに、僕は深い挫折を覚えて例の同期の二人に連絡してみたが、三人が三人共、やはり同じ想いをしていたことに内心少しホッとしてその日は眠りについたのだった。

僕は一人の現場監督のプロである人の背中に助手として張り付き、あらゆるノウハウを教わることになった。
その先輩はこの会社一のやり手らしく、なんと言っても頭の回転が早い人だった。そしてその知識も、建物のノウハウデパートと言っても過言ではなく、あらゆる応用が光っていて、その姿や判断力などは関心を超えてカッコよさを感じ、僕はその姿に憧れを抱いていくのが分かるほどだった。

そしてそんな僕はまるで目指す所を見つけたように、その人の手や足になることを誇りにまで感じながら仕事に励むようになった。
しかし意外だったのは、自分の性とも言うべき性格だった。
自分でも驚いたが、なぜか無理と言われれば言われるほど、それを成し遂げようとする責任感が非常に強いのだった。
例えば図面上での寸法で配管を収めようとすると、確かにその寸法は合っているのだが、その施工をするのにスペースがいっぱいで、ボルトを締めるのに工具ばかりか、手もやっと入るくらいの幅に職人さん達はこんなの出来ないだのの一点ばり。
仕方なく自分が挑戦してみるのだが、確かにそのやりにくさといったらイライラしてくる始末で、しかしそれでも僕はなんとかその狭い中に手を捻込み、時間を掛けながらも黙々とそれを取り付けて見せたのだった。
周りからはそんな僕に対して頑固者だの、意地っ張りだの散々からかわれるハメとなったのだが、そんな冗談の中にある程度の、困難な作業の達成に対する声援が混ざっているような気がしたのに、僕はこの現場という大変ではあるが、何か温かささえ感じる雰囲気が心地よく思えてきて、不思議に楽しくなってきていた。
そんな僕を先輩は影ながら見ていて、どうやら気に入ってくれたようだった。
そしてそんな忙しい中の毎日を僕は仕事中心にして生活し、ある時は職人さんの手伝いをしながらその技をも少しつづ憶えて、一つ一つ歩みを進めるように先輩に近づいていったのだった。
しかし、建物を造るとはなんと複雑で、しかもその仕組みに時たま首を傾げることもしばしばで、こんなに大変な構造に苦労が絶えない日々の連続に、時間は日捲りのカレンダーをパタパタと手で弾くように過ぎ、その度に自分が手掛けた建物が増えていき、そして自分も仕事に対して色々と物事が少しづつ分かるようになってきたが、一つ、そんな中で分からない事があった。
それは建物の屋上にひょこっと突き出て立った塔屋と呼ばれるエレ

ベーター機械室の中だった。
形をコンクリートで作ってから、エレベーターの取り付けを行い、そしてそこまでは確かに図面でも見ることが出来るし、その作業にもおかしい事はない。
しかし、問題はその機械室の上に、まるでこっそりと造られたような図面にない小部屋があり、全ての作業がある程度落ち着いた後に、奇妙な機材を搬入してはそれをその小部屋に取り付けるのだった。
しかしその施工はなぜかその現場の責任者である先輩が一人で行い、決してその際には他の人間を近づけないのだった。
この手足である僕でさえである。
機材は見たこともない記号が段ボールに記載されていて、中には何が入っているかさえもわからない。
僕はその搬入を行う度に、その作業を手伝わせて欲しいと頼んでみるのだが、先輩の答えはいつもなぜか、まだ早いで片付けられた。
そんな話題を同期の三人としていると、その内の一人が奇妙な事を教えてきた。
やはり彼の現場でも同じ状況の中、搬入の時に段ボールが一つ破れていて、気付かれないように中を覗くとそこにはテレビのモニターのような物が入っていたと言うのだった。
あんな小部屋でテレビモニターなんてまさか誰もあそこでテレビを見る訳がない。
きっとエレベーター内の監視カメラ用のものではないか？
僕はそう言っては見たが、そんな監視なんかを建物の屋上の、しかもあんな狭い小部屋で誰がずっと見ていてる必要があるのか。
普通それらは、警備会社とシステムが繋がっていて監視しているか、記録として撮っているだけで、それで事は足りる訳である。
しかもその彼曰く、そのモニターの入った箱と同じ記号が記載されたものが複数あり、間違っていても、仮にエレベーターだけの監視だとしてもそんな数は必要ないのは確かだった。
三人はそんな議論にその内熱くなり、それならばと日を改めて、秘

密を探りに行こうという事になった。
僕は先輩の残業にならない日取りをそれとなく探り、先輩が小部屋の作業を終える頃と合わせたところを見計らい、三人で連絡調整をした後に、いよいよそれを決行した。

鍵のある場所はだいたい見当がついていたのでことは案外スムーズに運び、僕らは懐中電灯を手に、その中を覗く事ができた。
しかしその小部屋には驚くことにテレビ画面が十台くらい上下二段に五つ並べられている前に、固そうな椅子があって、その両肘掛けにはレバーがあり、テレビモニターの下は机のようになっているそれには、色々なスイッチが無数にあった。
なんなんだこれは。
僕は思った。
盗撮？
まさか、建物の部屋全部を覗く仕掛け？
会社の名前の極秘ってそういうことだったのか？
僕の頭は良からぬ想像で支配され、それを打消したくてそのスイッチ類を押したくなった。
僕が真剣に頑張ってきた仕事の真相がもしこんな事に繋がっているなら。
僕は何だか悔しくなりスイッチ類に手を掛けようとした瞬間、後ろから先輩の待ての声がして驚き、我に帰った。
そして振り向いたそこには社長の姿もあり、僕達三人は怒鳴られる事を覚悟した。
しかし社長は笑いながら、秘密の訳を僕らに教えると穏やかに言うのだった。

僕ら三人は現場を任されることとなった。
そのためにまた研修へ一年行かされたが、今回はかなり意義のある

内容に、僕は改めて誇りと使命感を抱きそれに挑んだ。
その結果、僕は優秀な成績で最後の試験もパスし、会社に認められた。
いや、会社だけでなく、国にもだ。

実は僕ら、極秘建設が建ている建物全ての発注は国で、会社自体もそのことを影に隠すための仮の姿。
そのこと。
つまりは僕らが建てていたビルは、普段はビルなのだが、もしもの時に備えて設置れた近代兵器。
つまりは。
僕は任された建物の最後の仕上げの確認作業をするために深夜、例の小部屋の椅子に腰掛けてスイッチを入れてレバーを握った。
テレビモニターが一斉に外の景色をパノラマで映し出す。
次の瞬間、建物の壁から腕が出て、一階下の基礎から足が伸び、ビルは静かに立ち上がった。
色々な武器や各部の可動状況に問題はないらしい。
そう、つまりは僕らが建てていたのは巨大な防衛ロボットなのだった。
普段は建物。
それにしか見えないが、実は。
しかしそう言われてみれば、この頃の建物を見ると、棟屋にアンテナがピコピコと立っていて、それはまるで巨大ロボットの頭のように見えるものが多いい。
それの大半が、僕らの造った極秘の。
そしていつの日にか、この国、いや、この世界が危機に直面したときこそ、本当の僕らの仕事は始まるのだった。

おしまい。

いかがでしたか？
今日のオススメのカクテルの味は。
またのご来店、心よりお待ち申し上げております。では。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4290f/

ラブカクテルス　その８８

2011年1月4日12時08分発行